生命と人権を尊重し、良質かつ適切な医療を行います。

まほろば

Hirosaki National Hospital
2012.9
第133号

マンモグラフィー装置のご紹介

マンモグラフィー装置が9月1日より稼働しております。これは乳腺・乳房専用のＸ線撮影装置で、乳房を上下や左右からはさんで圧迫し撮影します。この度当院に導入された装置は、世界最小（小さければ小さいほど病変をみつけられる）の画質５０μｍを持つ富士フィルムメディカル社「アミュレット」という直接変換方式フラットパネルです。最新の画像処理技術を用いることにより病変部（石灰化、腫瘤）をより精細に描出し、更に被ばく線量を最小限にすることができ、検査時間も短縮することが可能となり、患者様の負担を軽減できます。女性独特のデリケートな検査なのでベテランの女性技師が撮影を行います。

「私たちが撮影します。」

また、検診マンモグラフィー撮影認定技師の資格取得者が従事しており、毎日の精度管理・撮影技術の向上により検査精度を高め、安心してマンモグラフィー検査を受けていただけるよう努めてまいります。

診療放射線技師長：杉田　章

樹木剪定

弘前病院敷地内には、サワラの木や赤松・桜などの樹木が３４本あります。

昨年冬の大雪で、枝に積もった雪で枝が折れたり、赤松は一部雪枯れとなったことから、伸び放題となった枝を剪定することになりました。

造園業者に依頼し、構内を見て回ったところ枝が伸び過ぎて、新しい葉っぱ（芽）が出ない状態だとわかりました。造園業者の見立てでは約８～１０年くらいは剪定をしていない状況であることから、今回は思い切って古い枝を全て剪定し、２～３年後に新しい葉が芽吹き、生き生きとした木に生まれ変わるようにしました。

それにしても暑い中、高い木の上で作業している職人さん、粋で格好いいと感じるのは私だけでしょうか。

剪定が終えて、玄関前ロータリー内は、見違えるようにキレイになりました。

３年後が楽しみですね。

業務班長：中野　喜代美

あずましく剪定された病院玄関前（あずましく ＝ 津軽弁：気持ちよいさま）

職場体験を受け入れて

全　体　説　明

８月１０日、青森県立弘前南高校の病院職場体験の受入を行いました。医療系進学を希望する生徒が病院を訪問し、医療従事者が働く姿を実際に見て話を聞き目指す職業の認識を深めることが目的です。訪問した生徒は、看護師希望が１０名、放射線技師希望が８名、理学療法士希望が５名の合計２３名で、夏休みの課題レポート提出を兼ねたものでした。

庶務班長：佐藤　博之

看　護　部

看護部では主に病棟内の見学をしていただきました。看護師が働いているナースステーション・処置室などの他に、患者さんたちが生活をしている病室や浴室等も実際に見て頂きました。看護師と言えば注射や先生たちの診察の介助などを思い浮かべると思いますが、私たちの仕事は患者さんが少しでも気持ちよく外来受診をしたり、入院生活を送って頂く事です。そのためには何よりも笑顔を忘れずに、患者さんに声をかけることの大切さをお話させていただきました。機会があったら、看護体験への参加もしてみて下さい。お待ちしています。

副看護部長：網谷　実千枝

放　射　線　科

弘前南高校の学生８名が、放射線の見学に訪れました。放射線は危険なイメージがあるので以外と大勢来たことに少し驚きました。放射線技師を選択した理由をつい聞いてしまったのですが、“物理がどちらかと言えば得意？”“コンピュータグラフィックっぽい？”どうやら後者が多いようでした。スライドで仕事の概要を説明した後、アンギオ装置を使ってゲームっぽくＸ線の不思議さを披露すると、みんなの眼がキラキラと夢中になってきて、説明している私もなんだか楽しくなってきました。最後に未来の後輩達にエールを送ります。

診療放射線技師長：杉田　　章

リハビリテーション科

リハビリテーション科では、理学療法について（内容・歴史・展望など）・弘前病院のリハビリテーションの特徴・理学療法士の待遇面などの話をしてから、実際行っている患者さんの見学や機器の体験を行いました。低周波治療や牽引などの体験は、びっくりしながら、楽しく行っていました。５名とも県内の養成校を受験するとのことでしたので、無事合格して、是非弘前病院に実習に来て下さいと話をしました。この５名の中で、もしかしたら実習に来て、そして一緒に仕事をしているかもしれませんね。

運動療法主任：佐藤　　洋

感　想　　～弘前病院を訪問して～

私は、理学療法学科の推薦入学を希望しているので今回医療機関訪問に参加しました。実際の現場で働く理学療法士の方々からお話を聞かせてもらった事は、インターネットや本で調べるよりも具体的な知識、経験を得る事ができ、理学療法学の理解をより深める事ができたので、とてもよい経験になりました。理学療法士になりたいという気持ちがより強くなったので、自分の目標に向けてさらに努力したいと思います。

弘前南高校　生徒より

第4回北東北国立病院医療研究会開催

平成 24 年 8 月 25 日（土）に第 4 回北東北国立病院医療研究会研究発表会が開催されました。今回の発表は 59 題で、前回、本年 3 月に開催された第 3 回の 91 題から大幅に減少しました。これまで当研究会は年に 2 回ずつ、計 4 回開催されましたが、どうも夏場（第 2、4 回）は発表演題数が少ないようです。

さて、研究発表会の様子ですが、発表されたポスターの総数が少なかったこともあって、会場（附属看護学校講堂）は余裕があり、それぞれのポスターの前で発表者や関心をもって集まった人々の間で意見交換するのにちょうど良い状況となりました。危機管理で病室の電源コード類を色別して見やすく整理したことの発表に対して、“その後はどうなりました？”“職員が意識して整理に努めていますか？”“いいえ、おもに私が気付いたところを直しています。”など、現場で関わった人ならではの質問があり、また改善のモチベーションを維持する難しさが語られました。もちろん、あちこちで、懐かしい顔が揃っての楽しい会話はこれまでと一緒。この手作り感がいいですね。

前臨床研究部長：泉井　亮

☆ 第５回発表会を平成25年３月に開催します。

風の子保育園運動会

９月９日（日）看護学校の講堂で風の子保育園の運動会を行いました。たくさんの父母、祖父母の拍手に迎えられてはりきっての入場行進。力強い選手宣誓、元気のいいラジオ体操、サンサン体操をし、競技が始まりました。

会場の真ん中に段ボール箱で出来た東京スカイツリーを目指して、親子で一緒に新幹線・バス・飛行機に乗って進んだり、箱車に大きいスイカ・りんご・バナナを「うんとこしょ」と一人で積みながら、あっちこちと引っ張りました。

今年は津軽弁を学ぼうと「じっちゃ」「ばっちゃ」の津軽弁講座を祖父母の競技に取りあげ、日常会話にあんまり使われていない言葉「なんづき（おでこ）」「おどげ（あご）」「どんず（おしり）」「まなぐ（目）」など一生懸命探して貼り、会場を盛り上げてくれました。

今年も、一日中親子の触れ合いを楽しみながら、たくさんの思い出を作ったことと思います。

みなさん、お疲れ様でした

風の子保育園　園長：諏訪　栄子

弘前病院の歴史　～古いアルバムから～

当院は、１８９７年（明治３０年）に弘前衛戍病院として創設され、１９３６年（昭和１１年）に弘前陸軍病院に改称し、１９４５年（昭和２０年）国立弘前病院として発足しています。

掲載の新聞記事は、弘前女学校（現　聖愛高校）の生徒７０人による毒ガス防護訓練が当院で行われたことを伝えています。

写真は、当院のアルバム「病院歴史別冊」の中の１枚を掲載したものです。

重厚な表装のアルバム「病院歴史別冊」には、歴代の病院長が威厳ある軍服姿で登場します。戦時色が濃い世相の下で、病院職員の息遣いが伝わりそうな「病院観桜会」や「病院創立記念パーティ」なども保存されています。写真だけではなく当時の弘前新聞の切り抜き記事や「弘前衛戍病院数へ歌」等も貼ってあり、時代を今に伝える貴重なアルバムです。

平成１６年に独立行政法人国立病院機構が設立され現在に至っていますが、時代は変わっても地域と協働して歩む病院であることは今も昔も変わりません。

アルバム「病院歴史別冊」

管理課長：加藤　久弥

霧の記憶

～毒ガス実験場アオモリ～

第２部「どこで造られたのか」　❹

ガス防護対策

マスク不足　無防備な国民

目の前の古ぼけた写真には、異様な光景が写し出されていた。

セーラー服の女子高生がガスマスク姿ですらりと並んでいるのである。写真には昭和12（1937）年2月の日付が入っている。

添えられている当時の弘前新聞の切り抜きを見ると、弘前女学校（現聖愛高校）の生徒70人が毒瓦斯（ガス）防護法と家庭救急法を学ぶために弘前陸軍病院を訪れたーとある。

弘前陸軍病院とは、現在の国立病院機構弘前病院のことだ。書庫の奥深くに眠り、今は院長室に保管されている「病院歴史別冊」とある。

「歴代の院長は目にしていたのでしょうが、私自身は初めて見ます。このようなアルバムがあることも知りませんでした」

日に焼けて黄ばんだアルバムを手に、同病院管理課長の加藤久弥さんが話す。

一般市民の「危機」に

女子生徒が緊張した面持ちでガスマスクを手にしていた75年前。日中戦争が始まるとともに、防空法が公布され、毒ガスは軍だけではなく、一般市民にとって「今そこにある危機」とみなされていた。核爆弾登場以前の大量破壊兵器とは、毒ガスにほかならなかったからだ。

40年に大日本防空協会が発行し、町内会の責任者に配った「防毒指導要領」には次のように書かれている。

「防毒ハ主トシテ敵航空機ノ使用スル毒性ノ瓦斯、煙霧、液体等ニ対シ機宜ノ防護処置ヲ講ジ以（もっ）テ被害ヲ防止シ又ハ軽減スルニ在（あ）ル」

つまり、敵の本土攻撃として想定されるのは爆撃機によるもので、その際には毒ガス弾が投下される可能性が極めて高いーと、政府と軍部は分析していたのである。

そのため各地では防空訓練が大々的に行われ、青森市も例外ではなかった。42年には市公会堂で国民防空展覧会が開かれ、ガス体験室で市民はガスマスクの装着を体験した。

これほどまでに軍部が毒ガス弾の空襲を恐れた理由。それは、市民が毒ガスの恐怖から逃げ惑うことで焼夷（しょうい）弾による火災の消火がおろそかになることにあった。

「瓦斯は怖れず毎らず」。防空訓練で繰り返されたスローガンは、人命というよりは、火に弱い木造家屋がひしめく国土を守るためにあった、と言っても過言ではない。

総生産数 推計580万個

では肝心のガスマスクの普及度はどうだったのか。ガスを恐れなくてもいいほど市民に行き渡っていたのか。

その問いに対する答えを、当時の内務省の指導で生産した「国民防毒面」の数から導きだそう。総生産数の推計は約580万個。「住民には到底いきわたらない」（「毒ガス戦と日本軍」岩波書店）数で日本の経済力の弱さ、生産性の低さを如実に表していた。

中央大の吉見義明教授（日本現代史）が入手した米軍文書は、44年の時点でもなお「日本の一般住民の防毒対策は劣弱で、毒ガスに対して無力」と言い切っている。

これは、ガスマスクが絶対的に不足していることはもちろん、皮膚に直接浸透するため、ガスマスクのほか防毒衣が必要なイベリットガスに対しても、国民が裸同然であることを意味していた。

そんなお寒い状況を裏付けるかのように、陸軍省の幹部の一人は終戦後、米軍にこう証言している。

「（毒ガスに）無防備で訓練されていない大量の国民が国中のいたるところにいた」

毒ガス防護法を学ぶために弘前陸軍病院を訪れた弘前女学校生徒。セーラー服とガスマスクの取り合わせが異様だ（1937年、国立病院機構弘前病院所蔵）

（平成24年９月12日付　東奥日報）

外来診療一覧

◆外来医師診療一覧表　（2012年９月１日現在）

診療科	区分	月	火	水	木	金
循環器内科		熊本秀樹	熊本秀樹	熊本秀樹	熊本秀樹	熊本秀樹
呼吸器科		山本勝丸	中川英之	中川英之	山本勝丸	中川英之
		下山亜矢子	下山亜矢子	下山亜矢子	下山亜矢子	下山亜矢子
消化器・血液内科		間山恒	－	－	間山恒	間山恒
		松木明彦	五十嵐崇徳	五十嵐崇徳	－	五十嵐崇徳
		佐藤年信	－	佐藤年信	松木明彦	佐藤年信
		石黒陽	石黒陽	－	石黒陽	石黒陽
小児科		三上珠希	野村由美子	杉本和彦	野村由美子	野村由美子
		杉本和彦	佐藤工	三上珠希	佐藤工	杉本和彦
		伊東竜也	千葉友揮	－	千葉友揮	伊東竜也
外科		田澤俊幸	高橋克郎	田澤俊幸	高橋克郎	三上勝也
					三上勝也	
乳腺外来		小田桐弘毅	小田桐弘毅	小田桐弘毅	－	小田桐弘毅
整形外科	午前	柿崎寛	柿崎寛	秋元博之	秋元博之	柿崎寛
		黒瀬理恵	黒瀬理恵	黒瀬理恵	間庭敬一郎	八重垣誠
		八重垣誠	千葉紀之	八重垣誠	－	秋元博之
	午後	－	－	－	－	柿崎寛
脳神経外科		－	－	木村正英	－	－
皮膚科	午前	熊野高行	佐藤正憲	佐藤正憲	熊野高行	熊野高行
		佐藤正憲	熊野高行	熊野高行	佐藤正憲	佐藤正憲
	午後	● 予約	● 手術／検査	● 予約	● 手術／検査	● 予約
泌尿器科	午前	神村典孝	神村典孝	神村典孝	神村典孝	神村典孝
産婦人科		木村秀崇	尾﨑浩士	鈴木洋一郎	● 妊婦健診（一般外来休診）	尾﨑浩士
		飯野香理	鈴木洋一郎	木村秀崇		飯野香理
眼科		蒔苗順義	蒔苗順義	蒔苗順義	蒔苗順義	蒔苗順義
耳鼻咽喉科		黒田令子	黒田令子	● 手術（一般外来休診）	黒田令子	黒田令子
		二井一則	二井一則		二井一則	二井一則
放射線科	診断	佐々木幸雄	佐々木幸雄	佐々木幸雄	佐々木幸雄	佐々木幸雄
	治療	－	－	川口英夫（午後）	－	川口英夫（午後）
女性専用外来		杉本菜穂子（※予約制／第１・第３火曜日午後診療）				
セカンドオピニオン		－	－	－	今充	－

※ 学会、出張などにより担当医師が替わる場合があります。

今月の川柳

★川柳募集★　あなたの川柳をお待ちしています。

院内の　樹木散髪　あずましく　(OB)

病院の　夏草刈られ　秋ちかし　(昭和世代)

※掲載作品は広報誌編集委員会で選出したものです。

お知らせ

患者相談窓口

『患者相談室』のＭＳＷ（メディカルソーシャルワーカー）が対応していますので、お気軽にお尋ね下さい。

編集委員会より

当院の広報誌『まほろば』は、地域に信頼され、納得の医療で地域に貢献しつつ、地域と協働して歩む病院づくりを目指し、地域の方々を対象に編集しております。皆さまから病院に対して『不安なことや不満足なこと』『ご批判やご指摘また、お褒めのことば』を職員一同お待ちしております。

発行元

Hirosaki National Hospital
独立行政法人国立病院機構 弘前病院

責任者：副院長　柿崎　寛

〒036-8545　弘前市大字富野町１番地
ＴＥＬ０１７２－３２－４３１１
ＦＡＸ０１７２－３３－８６１４
ＵＲＬ　http://www.hosp.go.jp/~hirosaki/